

置侍しも猶こちたし、中略されば我枕はこれらの品にはあらで、みづから老のするに二つの枕を求て、座の左右にして愛する事あり、一つは桑の木の圓枕なれば、その形によせてお玉と名づけ、今ひとつは滑なる方石なれば、やがてお岩といふ、むかし近くめしまつはせし少女のそれが名をかけるもの也、玉といひしは、むつくと肥て膚のすべらかなりしかば、おさなき比より傍にふさせ侍し新し枕も忘がたし、岩はよなく、あとさ、せつるに、踵のあらましくて、あかりのむつかしかりければ、思ひなぞらへていふなるべし、宋司馬文公が圓枕は、學窓にまろばし、長き眠のさめやすくして、讀書にたゆみなからしめむが爲に、孫楚が流を枕せしは、耳を洗はむが爲とかや、下官が愛するは、さる心にあらで、桑は中風をふせぎ、石は頭熱をさまさむとなり、唯よく生をやしなふ便なれば、あにいたづらふしといはむや、或日ひとりの友來りて、此二枕をあやしみて、猿のつぶりやもたりけむと笑ふに、此記をかきてその人に答ふるのみ、

狂云、此記ハ世々ニ傳寫シテ焉馬ノ誤モ有ルベキカ、略下

〔七十一番歌合〕中四十三番 左 枕賣

むろ出しまだひもやらぬ新枕かぶれか、りてそひもはてばや、略中

左漆にかぶれか、る巧なれども、右隠し針、人にしられぬ當道の秘事とかや、略下

〔毛吹草〕三播磨 同○室枕

〔人倫訓蒙圖彙〕六滑革師 革は所々の穢多これを造る、革師これを求て、馬具銀袋、蒲團、枕等是を

つくる、略中 春日通東洞院の西にあり、

〔古今和歌集〕十九題玄らす

枕より跡より戀のせめくればせむかたなみぞとこなかにをる

讀人玄らす

〔後撰和歌集〕十八つねになきな立ち侍りければ

伊勢